



Title	大腸癌に対する術前化学療法の効果に関する研究：組織学的变化を中心として
Author(s)	福田, 一郎
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33585
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	ふく 福	だ 田	いち 一	ろう 郎
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	5938	号	
学位授与の日付	昭和	58	年	3月17日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	大腸癌に対する術前化学療法の効果に関する研究 —組織学的变化を中心として—			
論文審査委員	(主査) 教 授 神前 五郎			
	(副査) 教 授 北村 旦 教 授 松本 圭史			

論文内容の要旨

〔目的〕

大腸癌の手術成績向上の一手段として、大腸癌症例に術前化学療法を施行し、その切除標本の組織像について、化学療法施行前と施行中、施行後の組織像の変化について検討を行い、どのような投与方法を行うべきかを明らかにしようとした。

〔方法〕

大阪府立成人病センター外科で昭和50年12月より昭和57年8月までに手術を施行した大腸癌287例中、術前にTegafur坐剤を投与した39例につき検討を行った。

検索方法はまず内視鏡的生検により組織採取を行い、その後Tegafur坐剤を0.75～2g/日、総計12～108.5g（平均26g）投与し、投与中、投与後に繰り返し、投与前に組織検索を行った領域の組織検索を行った。組織像の検索は³H-Thymidineのlabeling index, mitotic index, 癌細胞の変性度（北出らの規準をmodifyしたもの）で行った。

〔成績〕

- (1) Tegafur坐剤投与前に自覚症状を有していた35例中19例(54%)は坐剤投与により下血、テネスマスなどの自覚症状の改善がみられた。副作用に関しては著明なものは認められなかった。
- (2) Tegafur坐剤を投与した症例で投与前後にautoradiogramを作成し得た6例についてmitotic indexとlabeling indexの関係をみると両者は相関する傾向にあった。
- (3) Tegafur坐剤の投与量と組織学的变化の関連性を同一症例で経過観察出来た12例でみると高分化腺癌、中分化腺癌とも投与量が増えるにつれてmitotic indexは低下した。また高分化腺癌では投

与前にくらべて投与後に変性度が高度となった症例が多くみられた。

- (4) Tegafur坐剤の投与量別に mitotic index の平均をみると、高分化腺癌の mitotic index は投与前には 19.8 cells/1000 cancer cells であったが、5～10g 投与で 9.4 cells/1000 cancer cells に低下し、さらに投与量を増やすと少しづつ低下した。中分化腺癌の mitotic index は 20g 以下の投与では投与前とほとんど変わりはなかったが、21g 以上投与ではじめて投与前よりも少し低くなつた。しかし、mitotic index が 0 になる症例は 1 例も認められなかった。
- (5) Tegafur坐剤の投与量と癌細胞の坐剤投与前に対する投与後の変性度の変化をみると、高分化腺癌は投与量が 5～10g でも軽度変化を半数に生じ、11g 以上では高度変化の症例も認められた。ところが中分化腺癌は投与量にかかわらず変性度に変化を認めないもののが多かった。
- (6) Tegafur坐剤の投与終了後の日数別に mitotic index をみると、投与前にくらべて投与終了後 3 日以内に組織採取されたほとんどの症例は著明な mitotic index の低下をみたが、投与終了後 4 日をすぎると mitotic index の上昇傾向がみられた。
- (7) Tegafur 坐剤の投与終了後の日数別に癌細胞の変性度をみると、投与終了後 3 日以内に組織採取されたものでは変性度が投与前にくらべて増強されたもののが多かったが、投与終了後 4 日以後では回復する傾向がみられた。
- (8) 腫瘍の肉眼的変化（腫瘍の縮小）は癌細胞の変性度が高度なもの、深達度の浅いものに高率に認められた。

〔総括〕

大腸癌患者の術前に Tegafur 坐剤を投与した結果、著明な副作用を認めず、かえって自覚症状の改善がみられ、術前に安心して容易に使用可能であることを確認し、さらにこの術前投与は明らかに腫瘍の組織学的効果を示したが、これは癌の組織型、薬剤の投与量により差異が認められ、細胞効果は投与終了後約 3 日で消失した。この成績はこの薬剤の投与方法に大きな示唆を与えるものである。

またこれら Tegafur 坐剤の術前投与を施行し、根治手術が出来た 33 例の累積 5 生率は 83.3% と良好であった。

論文の審査結果の要旨

大腸癌患者 39 例に Tegafur 坐剤を術前に投与し、主として生検材料を用いて経時的に mitotic index、癌細胞の変性度を検討した結果、投与量が増加すると退行性変化は強くなつたが、とくに高分化腺癌でこの傾向が強く認められた。また投与終了後 4 日以上経過すると再び増殖傾向が認められた。したがつて Tegafur 坐剤を術前投与に使用する場合、手術直前まで使用することが重要であり、とくに高分化腺癌においてはより効果が期待できるという結果が得られた。価値ある研究と考えたい。